

研究発表 4

排泄・入浴ケア

認知症ケア

ケアプラン・相談援助

その他（施設系）

4-1

演題	10周年への「想い」
副題	～レジデンシャル常盤台の Only One～

広報誌
10年史

法人名	社会福祉法人 育明会
施設名	レジデンシャル常盤台

発表者名 (職種)	小久保 雄紀 介護職員
共同発表者	久保寺 良次
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市保土ヶ谷区常盤台 74-7
TEL	045-348-8001
FAX	045-348-8002
メールアドレス	info-tokiwadai@ikumeikai.net
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	平成 23 年 4 月開設、令和 3 年 4 月に増設し新棟併せ本入居 160 床ショートステイ 20 床のユニット型特養です。開設当初より「リスペクトケア」を合言葉に、最期まで「その人がその人らしく」過ごして頂ける様、寄り添ったケアに取り組んでいます。
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

開設以来毎月欠かさず発行している“常盤台便り”についての記事作りから、10年記念誌まで、幅広い広報活動を行っています。

取り組んだ課題

- ① 毎月欠かさず発行している常盤台便りの中にある特集記事の Only One をまとめた。委員会で行事の事だけでなく命の尊さを意識した記事作りとしてアゲハの成長記録などを取り上げるなど委員からのアイデアを活かしスーパーバイザーに意見をもらいながら今までは違う切り口で記事を作成。
- ② スーパーバイザーの発案により開設 10 周年を記念した「10年史」の作成に着手。施設の「想い」を具現化するためのサポートを行った。

具体的な取り組み

- ① イベントの際には委員がカメラマンとして同行し撮影を行った。
毎週第 3 木曜日に行う委員会で常盤台便りに出す記事の写真の選定を行い割り付けをしスーパーバイザーの指摘により改良を重ねた物を常盤台便りとして発行する。
スーパーバイザーより写真にストーリーがある事を意識し撮影の際には一瞬一瞬の大切な瞬間を意識することが大切と教わり撮影の際には意識して撮影を行った。記事作りを行うにあたり難行していたところボランティアさんから施設に寄贈されたさんしょの木に卵がついており幼虫になり調べたところアゲハ蝶だった為職員による成長記録をつけていたでその事を記事に取り上げた。
委員会では記事や写真の反省会をし翌月の記事をよくするような話し合いをした。
- ② 10年史作成は Only One の収集と過去の記事から抽出し過去の編集者へ依頼をし編集者から紙面に収まるように 2 ページに写真や言葉選びの打ち合わせを行った。常盤台便りに半年にかけ謎かけのような予告を行う。

活動の成果と評価

10年史についてはトップページに 10 年の思い出の Only One の写真を載せる事となった。また事業報告と総括を載せた事により 10 年史をご家族様やご利用者や関係者や職員に配り愛読された方達に伝えることが出来た。
施設見学に来ていただいたから記事を見た方の話しでは自由に広報されており他の施設では見た事ないとの声を頂きました。

今後の課題

以前から課題の写真の技術の向上を目指し一瞬一瞬を大切に写真や飽きられない記事作りをし開設後より常盤台便りは第 133 号の発行になります。これからも楽しみにされている方の為に飽きられない記事作りをし発信していきたいと思ひます。

4-2

演題	私たちの『夢プラン』
副題	～ご利用者様の希望を叶えます～

ケアプラン

法人名	社会福祉法人 大地の会
施設名	特別養護老人ホーム 塩田ホーム

発表者名 (職種)	河田 一郎 介護支援専門員
共同発表者	本間 美智子
共同発表者	田嶋 研二
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	相模原市中央区田名塩田 2-5-24
TEL	042-778-4090
FAX	042-778-4876
メールアドレス	shioda-jim@daichinokai.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	従来型（四人部屋）51人 ユニット型個室 49人 従来型短期入所個室 2人 ユニット型短期入所 18人 通所介護事業所 24人 居宅介護支援事業所 訪問介護事業所
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

コロナ禍において、様々な行事やレクリエーションが中止になるなかで、何か利用者様に楽しんで行える事、ご本人が行いたい事、思いを実現するためにご本人、現場職員、ケアマネ話し合い、目標を実現させました。誰が見ても利用者様の叶えたい事はこれだと分かるようにケアプランの中に☆をつけました。

取り組んだ課題

コロナ禍において一切レクリエーションが行えていない状況の中で、散歩に出かける等の簡単な事から、水族館に行きたい等の遠出の外出レク等、いかにご本人の思いを抽出し、職員と共有し、実現していくか。コロナ禍において、どのようにレクを実現していくか。各職種の外出におけるの基準の曖昧さ。

具体的な取り組み

ご本人が何を行いたいのか聞き取り表を作成し、半年毎のケアプラン作成時に職員に聞き取りをして頂き、ケアマネがその聞き取り表を元にご本人や各職種に聞き取りを行い、より具体的に、その方にあったプランを作成する。☆のついたプラン一覧を作成し、基本的には半年に一回プランを実行できているか確認する。

活動の成果と評価

より利用者様個人の思いや希望を現場職員と共有でき、月に数件ではありますが、施設外に行くレクリエーションも実現できたと思います。特に自分が意見を発する事が難しい利用者様に対し、職員がこうしてあげたい、こういう事をやってあげたいという意見が聞き取り表に記入して下さるようになったことが、ケアマネ自身もこんな事を考えて下さっていたのかと嬉しく感じ、実際に利用者様のQOL向上に繋がったかと思っています。

今後の課題

職員不足もあり、半年に一回以上行えていないプランも実際にはあります。5月8日以降は感染委員会

で話し合い次第ではもっと遠出のレクリエーションやお祭り等も開催できればと思います。

参考資料など

聞き取り表は研究発表当日に何部か持参致しますので、興味がある方はお声かけ下さい。

4-3

演題	生きがいで死にたい気持ちを克服するまで
副題	～植物の力で死を願う利用者が前を向くまで～

法人名	社会福祉法人 ユーアイ二十一
施設名	太陽の家

発表者名 (職種)	村山 友基 介護職員
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横須賀市西浦賀 6-1-1
TEL	046-846-5133
FAX	046-846-5233
メールアドレス	jinzai_ikusei@ui21.or.jp
URL	https://www.ui21.or.jp

今回の発表施設 またはサービスの 概要	私達【太陽の家】は、本入居 111 床 ショートステイ 21 床、デイサービス定員 30 名の施設です。横須賀市浦賀の山の上であり、早朝に見える朝日、天気の良い日は浦賀の海、千葉がとても綺麗に見渡せる場所に位置しています。
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

A 様は入居される前から、鬱病を患っており、年金事務所や警察に行かれ、金銭に関する不安を伝える事や、ご自宅にて不安から 2 回、自傷行為をすることも見られていました。施設に入所されてからも変わらず、ふとした時に不安が募ってしまう様子が見られていました。入居されてから、隣席にいたご利用者様 2 名と良くお話をされ、仲良くなり「大丈夫よ」「そんなこと言わないで」と励ましや、心配の言葉を掛けてもらっている姿も見られました。励ましや心配の言葉を掛けられても尚、付きまとう不安に対して、その不安を少しでも軽減、または解消するためにはどうすればよいのか。多職種で連携してカンファレンスを行い、浮かび上がった課題の解決に向かって A 様と一緒に一歩ずつ進んでいきました。

取り組んだ課題

本人が生活していく中で、なぜ、不安が募ってしまうのかを、アセスメントした結果、テレビ鑑賞や隣席の仲の良いご利用者様 2 名と談笑をする毎日を送っていることが、不安の解消には至らず、自分からも行動的ではない事が原因と考えました。その為、日々の生活を送る中で、何か A 様が興味を持ってを 1 つずつ試しながら探していき、興味を持ったことについて取り組んでもらうことで、【不安について考えなくても済むようにする事】を課題とし、取り組んでいきました。

具体的な取り組み

A 様の感じている不安を軽減、もしくは解消するために、楽しみを持って過ごせる時間や、集中して取り組めることを見つける為、様々なレクや、興味を持つてくることを 1 つ 1 つ探して行きました。風船バレーをやってみたり、フロアー内を一緒に歩いて回って見ないか誘い、一緒に散歩をしてみたり、カラオケマシーンを借りて来て、一緒に歌を唄って見ないか誘い、歌を唄ってもらったりと、1 つ 1 つ出来る事、思いついたことを試し、A 様の反応を記録し、多職種で把握し、評価をしながら取り組みました。

活動の成果と評価

成果としては、ユニットの中庭にある植物に興味を持たれた様子があり植物と関わることに的を絞り A 様に植物を見に誘ったりお世話を一緒にしないか誘うと、とても楽しんで、花や植物を眺められたり水やり等のお世話をされていました。A 様自身から中庭の植物に意識を向けられるようになり、日に日に不安の訴えが聞かれなくなっていきました。また隣席ご利用者様に対してもご自分から進んでお世話をされる様になり、どんどん笑顔を増やすことが増えていきました。

今後の課題

現在、A 様より、不安の訴えは殆ど聞かれなくなりました。しかし、今後、いつ、どのような時に不安の訴えが出てくるか分かりません。季節の変わり目や、ご利用者様の入れ替わり等、A 様の気持ちの変化しやすい場面を想定し、対策を立てられるように検討を行っています。また、鬱病に限らず、精神に関わる病気について勉強会を開こうと考えています。

参考資料など

- 論文「花の観賞は心身のストレスを緩和する」
(農研機構発表)
- 論文「人と健康と緑の知覚」
(桐蔭横浜大学工学部発表)

4-4

演題	認知症対応強化ユニットの効果的運営
副題	

認知症ケア

法人名	社会福祉法人 蓬莱会
施設名	ケアプラザさがみはら

発表者名 (職種)	伊藤 茂 介護職員
共同発表者	天谷 和成
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	相模原市緑区大島 295
TEL	042-713-3818
FAX	042-713-3827
メールアドレス	careplaza-sagamihara@vesta.ocn.ne.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	平成 24 年 6 月開設。定員 140 名（入所 130 名、短期入所 10 名）のユニット型特養。理念である「敬愛」「奉仕」「協和」の精神のもと、ご利用者様の尊厳と人権を守り、ご本人の望む暮らしの獲得を目指しています。
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

認知症による心理・行動症状 (BPSD) により、ユニットでの共同生活を送ることが困難な入居者様に対して、認知症対応に特化したユニットを設立し、日々を穏やかに生活できる環境を整備することを目標に取り組んだ。

取り組んだ課題

今までは各ユニットに認知症の心理・行動症状 (BPSD) により共同生活を送ることが難しく、入居者様同士でストレスを感じ、介護スタッフもその対応に悩んでしまうことがあった。そのため試験的に「認知症対応強化ユニット」を新たに設置、入居者が穏やかな生活を送ることが出来る環境を重点的に整備する取り組みを開始した。

具体的な取り組み

- 取り組みの手順
- ① 運用の開始【令和 3 年 1 月～】
 - ・ 職員配置の変更と入居者様の移動を開始。ユニット移動による入居者様への負担を最小限にするため、移動日程の調整を行った。また、ケアの方針として、職員の意識改革をする為に「認知症対応強化ユニット」の設置目的を職員一人一人に面談を行い、説明した。
- ② 通常は月に 1 回のレクリエーションだったが、月ごとに担当を決めて心理・行動症状 (BPSD) の軽減のために、毎日大小さまざまなレクリエーションを習慣化した。
- ③ 継続的な評価と修正の実施
 - ・ 介護スタッフをはじめ他部署職員も参加する会議を毎月実施し、「認知症対応強化ユニット」の運用上の課題の確認と対応を行った。
- ④ 入居者様の意向を尊重した対応を取ることとした。一例として歩いてしまわれることでの他入居者様とのトラブル回避の為、行動制限をしていた方が「認知症対応強化ユニット」に来たことで行動制限をすることなく過ごせるようになった。

活動の成果と評価

- 1、運用前と比較して暴力・大声・不安など心理・行動症状 (BPSD) の軽減がほぼすべての入居者様に認められた。ご家族様より、「以前の施設では表情も暗く活気もなかったのに、今日会ったらすごく元気で表情も明るく、いろいろと話してくれた」と喜んでいただくことができた。
- 2、「認知症対応強化ユニット」以外のユニットでも、落ち着いてケアが出来るようになった。
- 3、「認知症対応強化ユニット」で対応、状態が安定してから別のユニットに移動していただくことで、新規入居や状態の急激な変化にも柔軟に対応することができるようになった。入居検討においても認知症対応に特化したユニットを設置したことで受け入れの幅が広がり、今までは受け入れ困難とされるような待機者も 8 名受け入れることができた。
- 4、「認知症対応強化ユニット」運用開始前は、対応困難による精神科病院への入院ケースが平均 2 件 / 年あったが運用開始後は 0 件となり、入院治療に頼らず施設のケアで対応できるようになった。
- 5、毎月のレクリエーションの習慣化により、不安症状が出た方に対して自然と気持ちの切り替えを促すことができるようになった。

今後の課題

認知症対応強化ユニットにおいては職員の意識改革を図ることができたが、施設全体にまでは至っていないため、今後は施設全体に同様の考え方を広げていく必要がある。またこれまでは専門的な知識の習得についての取り組みが不足していたため、現在は介護部門のリーダークラスやケア強化ユニットの配属職員を中心に、認知症ケアに関わる外部研修に積極的に参加し、より多くの職員が個々のスキルアップを図る必要がある。

4-5

演題	ウェルビーイングを目指した認知症ケア
副題	～ペット型ロボット「LOVOT」の導入効果～

認知症ケア
介護ロボット

法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
施設名	わかたけ青葉

発表者名 (職種)	加藤 綾 介護職員
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市青葉区奈良 4-6-1
TEL	045-960-0651
FAX	045-960-0653
メールアドレス	nakamura_akira@wakatake.or.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	横浜市青葉区に2006年3月に開所。入居定員100名、ショートステイ20名のユニット型の介護老人福祉施設です。「職員一丸となって人を幸せにします。」という法人使命のもと、自分自身が利用したいサービス実現に努めています。
---------------------------	---

研究の目的、PRポイント

利用者様が尊重され、幸せに生きること、施設生活においてウェルビーイングな環境とはどのような状態なのか、職員誰もが模索していることと思います。今回は、認知症高齢者と介護者を対象にペット型ロボット「LOVOT」の導入による変化について報告します。

取り組んだ課題

業界変革において、介護現場での生産性向上の取り組みは喫緊の課題である。私達の施設では、介護現場の最小人数オペレーションを実施。その中で、身体的、精神的負担が職員アンケートであがっていた。そこで、身体的、精神的負担を軽減することは、利用者様、職員にとってウェルビーイングな状態につながるのではないかと模索してきた。今回は、LOVOT導入における職員の精神的負担と利用者様の変化について明らかにすることを目的に取り組みを行った。

具体的な取り組み

施設内の2ユニットに1台ずつLOVOTを配置。職員10名を対象に以下(1)、(2)の比較、利用者様を対象に(3)の調査を実施した。

- (1) ストレス測定器での測定
精神的負担をデータで可視化することを目的に疲労ストレス計を活用し、自律神経のバランスからリラックス状況の計測。LOVOT導入前後1週間、就業前後の1日2回、測定を行った。
- (2) 自記式アンケートの実施
精神的負担の一つに認知症ケアに対する不安が強かったことを受け、厚生労働省の職業性ストレス簡易調査(57項目)と合わせ、認知症ケアについてのアンケートを実施。結果は厚生労働省版ストレスチェック実施プログラムで分析を行った。
- (3) タイムスタディ調査
感染予防のためのテーブル上のパーティション設置、テーブル間隔を広くとることで利用者様同士の交流が減少し、居室で過ごす時間が増えていた。そこで、ご利用者様の同士のかわり、ユニットの滞在時間をLOVOT導入前後3日間の調査を行った。

活動の成果と評価

- (1) ストレス測定器での測定結果
職員の中央値の比較では、導入前は健全な状態(低ストレス、高回復)、導入後はやる気の状態(高ストレス、高回復)となり交感神経優位の状態に変化した。導入前後ともにリラックスして仕事に望んでいるという結果であった。
- (2) 自記式アンケート結果
ストレス簡易調査の分析結果では、量やコントロールをまとめた項目である「健康リスクA」、上司、同僚の支援をまとめた項目である「健康リスクB」、「総合健康リスク」の3項目に分類。いずれの項目も導入前よりリスクが低い状態となった。
また、認知症ケアについての不安感は取り組み前は8割の職員が不安を感じていたが、取り組み後は2割に減少した。
- (3) タイムスタディ調査結果
利用者様同士の会話、ユニット滞在時間も増加した。
上記の結果から、ストレス測定器での自律神経バランスデータと職員が感じている精神的負担感には乖離があった。
ストレス簡易調査と合わせて行ったアンケート結果からは、利用者様の笑顔、職員の笑顔が増え、仕事を楽しいと感じている職員が増えた結果となった。
また、今回の取り組みに対して職員満足度は90%となり、取り組みに対して効果があったと考える。

今後の課題

ご利用者様、職員にとってウェルビーイングな状態を目指すことに終わりではなく、常に改善を継続していく必要がある。今後も課題を明確にし、達成に向けて介護ロボット等も活用しながら効果測定を行っていく必要があると考える。

参考資料など

厚生労働省、「職業性ストレス簡易調査(57項目)」
https://www.mhlw.go.jp/bunya/roudoukijun/anzen/sei12/dl/stress-check_j.pdf

4-6

演題	ずっと我が家を目指して
副題	～かかわりを通じて、見えてきたこと～

法人名	社会福祉法人 上溝緑寿会
施設名	ずっと我が家上溝本町

発表者名 (職種)	庄口 美咲 介護職員
共同発表者	ホス 亜希
共同発表者	西澤 典久
共同発表者	平田 まどか
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	相模原市中央区上溝 6-2-22
TEL	042-762-0013
FAX	042-713-3165
メールアドレス	day@cosmos-c.or.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	デイサービス、ホームヘルプ、ショートステイを展開する在宅サービスの複合拠点として、また地域福祉を推進していく上での活動拠点として、平成25年12月に開設いたしました。大桜や蔵のある広場があるのが特徴です。
---------------------------	--

研究の目的、PR ポイント

利用される方の立場になって、馴染みのある環境設定をして、数多くの認知症の症状がある方に利用していただいています。今回は環境だけでなく、各専門職との連携と、その方に応じたケアの取り組みにより、穏やかに利用ができていた事例を通じて、取り組んできたことで共通する内容などを見出すことができるのではないかと思います、まとめてみました。

取り組んだ課題

私たちは認知症高齢者の方々が住み慣れた地域で生活を継続していく上では、ショートステイが必要だと考えます。ただ認知症でも様々な症状があり、利用することに高いハードルがあることも事実です。そこで実際に利用された方々を中心に、各専門職が課題を共有し連携を取る中で、どのようにして状態の改善または維持を図ることができ、安心して過ごすことができるのか、そのケアの取り組みについて紹介していきます。

具体的な取り組み

環境設定としてユニット単位となっており、個室とリビングといった公私を明確にした生活空間を設定し、木造住宅ならではの落ち着いた室内環境や四季の移ろいが実感できるように、窓枠を広場が眺められる位置に設定するなど、今自分がどこにいるのかを実感してもらい、安心して過ごすことができる環境を準備しました。その中で次のような内容について主に取り組んできました。

- ① 積極的なコミュニケーション
見知らぬ場所や人の中での不安感を軽減するため、まずは会話を通じて安心していただくこと。また今までの在宅生活に近い環境を提案できるような様々な情報を収集すること
- ② 状態の観察
現状の課題を抽出し、本人に合わせたケア内容を決める為、認知症状の程度やADLを把握すること
- ③ 他者との交流
会話やレクリエーションへの参加を促し、楽しみや発見、意欲の向上に繋げていくこと

④ リハビリの実施

体操や散歩の実施にて、体力の低下予防・維持向上を図り、一日でも長く健康でいられる身体を目指すこと

活動の成果と評価

環境の持つ力によって、認知症高齢者の方々も初日は落ち着かなく不安な様子を見せられることがありますが、2日目には、表情も和らぎ落ち着いた姿をみせられます。また食事・水分摂取量や排泄状況などから認知力が低下している要因を探り、その方のケアのポイントを統一し実施していくことで、徐々に身体機能も改善し、認知力も高まっています。通常であれば、ほぼすべての方がこれにより周辺症状の緩和が見られます。また適切にかかわりながら、その人の居場所を作ることにより心の安定を図ることができ、日常の家事仕事などを実施するなど役割を作ることもその一つです。

今後の課題

利用者の方々は、日々生活を共にする中で、とても生き活きとした表情や場面をみせてくれます。認知症であっても、まだまだ凄いと感じる能力を持っています。家族の方に、残された能力の素晴らしさをどのように伝えていくかということ、日常生活での介護のポイントをどのように伝えていくかが課題となります。

参考資料など

自立支援介護ブックレット（筒井書房）

- ①水
 - ②歩行と排泄
 - ③認知症ケア
 - ④食事
- 著書 竹内 孝仁

4-7

演題	おとなりさんもサポーター
副題	～入所者と一緒に取り組む認知症ケア～

認知症
入所者参加

法人名	社会福祉法人 中心会
施設名	えびな南高齢者施設

発表者名 (職種)	大塚 貴子 介護職員
共同発表者	阿部 順子
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	海老名市杉久保南 3-31-6
TEL	046-238-7681
FAX	046-238-7682
メールアドレス	ebinaminami@chusinkai.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、デイサービス等を複合。地域で専門的なサービスを通じ自分の家族や隣人の存在を素直に喜ぶことが出来る社会作りを目指し「あなたがいてくれて良かったと思える街づくり」を合言葉に活動している。
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

養護老人ホームは、ほとんどの入所者が自立して生活している。入所者は、身体に不自由なく、掃除、洗濯等も出来、好きな時に外出されている。しかし入所後、認知機能が低下する方もいる。今まで何も問題がなかったのに、物忘れや徘徊が現れてくる。そうすると、入所者同士が行動の異変を指摘するようになり、認知症の方は増々生活しづらくなってしまふ。認知症になっても、入所者同士互いに労り合う世界を作る為には、入所者に「認知症」のことを、正しく理解して頂くことが必要だと考えた。

取り組んだ課題

入所者に認知症のことを正しく理解してもらうこと

- 認知症になった人を「別の世界に住んでいる人」という目で見てしまうので、別世界の人に対して優しく接することが出来るようになること。
- 職員が認知症の利用者に接する時、入所者を巻き込んでケアが出来るようになること。

具体的な取り組み

- 入所者が認知症について、どれ位知識があるのか認知症に対してどんなイメージを持っているのか【認知症についてのアンケート】を作成し調査した。
- 【認知症勉強会】を開催した。認知症の種類や症状について、関わり方等基本的な事についてテキストを作成した。
- 勉強会の効果を確認する為に【勉強会后アンケート】を作成した。
- アンケートで入所者の興味を確認した職員は【認知症サポーター養成講座】を開催することを決めた。
- 【認知症サポーター養成講座】を開催した。
- 認知症サポーターが認知症の方に対して、どのような支援が出来るか、具体的な活動内容を認知症サポーターと職員で話し合っ決めて。

活動の成果と評価

- 入所者が認知症勉強会・アンケート・認知症サポーター養成講座を経験したことで、少しずつだが、認知症に興味をもってきている。
- 「自分にも支援が出来る」と自信に繋がった。
- 入所者同士の仲間意識が芽生えた。

今後の課題

- 認知症サポーターが、主体的に認知症の方に対して支援する事が出来、それが生きがいに繋がること。
- 定期的に認知症サポーター活動会合を開き、活動の報告や、困っていること等を、話し合う場を設けていき、継続的な活動に繋げていくこと。
- 認知症サポーター活動内容について職員でも考える会合を開き、認知症サポーターが支援活動しやすい環境作りを維持していくこと。

4-8

演題	ご利用者の QOL 向上を目指して
副題	～脳機能との関連における一試～

法人名	社会福祉法人 道志会
施設名	道志会老人ホーム

発表者名 (職種)	山口 武志 その他
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	綾瀬市早川城山 2-11-3
TEL	0467-76-3399
FAX	0467-70-4770
メールアドレス	dsknh3399@gmail.com
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	社会福祉法人道志会老人ホーム 施設の理念「福祉は愛」 入居者定員：本入所 90 名、ショートステイ 10 名 3 フロアで軽度・重度・認知症で分けられ、専門的知識や技術の習得と専門性に特化するために分けられています。
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

施設で過ごされている利用者の残存能力の維持、増進に機能訓練指導員としてできることは何かと試行を重ねているうちに、ある方向をもった感触らしきものが得られたので、多くの方の知識や意見を受け、更なる進展を目指したく発表に及びました。

取り組んだ課題

身体機能訓練と脳機能訓練の相互作用的な活用を図らなければ施設入居者の残存能力の維持、向上には十分でないことを肌で実感しました。特に脳機能の低下予防がいかに重要であるかを深く認識するようになりました。

そこで脳機能と身体機能のメカニズムに関心を持ちながら、脳機能の衰退減少に向けて種々の取り組みを試みました。

具体的な取り組み

要介護 5 認知症自立度Ⅱ a

要介護 5 認知症自立度Ⅲ a 計 2 名の方を対象に下記の取り組みを行いました。

第 1 の取り組みは、利用者には図 1 の計算式（足し算、引き算の計算式）の回答を口ずさみながら図 2 の刺激係数の高い図形（ピラミッド型の大三角形の中に小さな三角形が多数配置されている）を目にすることで脳の左半球の新皮質後部を使い、同図形の中から計算式の答えである数字を探すことで集中力を練ることにもなります。指差し選定による回答方式とした理由は、手指を適度に刺激することによって脳の働きを活発にすることが狙いです。

第 2 の取り組みは、図 3（動物の全体像を半切したもの）のように、動物の全体像を 2 分の 1 にカットしたカードを複数ランダムに並べて、その中から、利用者に動物の姿の完成（2 枚 1 組）を求めると同時にその動物の名称を言語でも認識してもらうものです。手のひらや手指を使用して、動物の姿とその名称を、分断されたカードを並べ替えながら動物の姿を完成させることで、身体の活動と脳機能の活性化の共働きを図ります。

以上の取り組みについては、当職 1 名で、利用者 1 名につき所要時間 20 分を週 3 回実施しました。

活動の成果と評価

今回の取り組みの結果、従来言葉を交わさなかった利用者が単語だけを表音して当職に接近してくるようになったり、利用者の得意分野の話をしながらい人々に筆記具と紙を渡してみたところ、カレー料理の具材やレシピを紙に表記するようになりました。また、トレイ（縦 30cm、横 40cm）に乗った食事の左側部分（全体の 5 分の 1 程度）を残していた利用者（脳出血の既往歴があることから「半側空間無視」の可能性がある。）がトレイ上の食事を完食するようになったなどの変化が見られました。

なお、評価に関しては、参考資料の 3 により、当職の判定で、いずれも 1 段階の上昇が認められました。

今後の課題

今後も、利用者の残存能力の把握に努め、脳機能及び身体活動能力の減少を招かないよう例示した項目の種類を増やし種々工夫を凝らしながら、一層尽力したいと考えています。

参考資料など

- 1 認知症ケアの予防とケア
公益財団法人長寿科学振興財団
第 4 章認知症の予防 4、運動の視点から
島田 裕之（国立長寿医療研究センター部長）
- 2 第 4 章認知症の予防 6、社会的交流・知的活動の視点から
藤原 佳典（東京都健康長寿医療センター研究所部長）
- 3 FIM 講習会資料
慶應義塾大学医学部
リハビリテーション医学教室
- 4 スッキリハッキリ頭の健康法
日本実業出版社
高橋 浩（NHK 中央研修所教授）
- 5 札幌医科大学リハビリテーション医学講座
（2016.12.31）
石合 純夫

4-9

演題	スライディングボードの活用
副題	～スライディングのより効果的な活用～

法人名	社会福祉法人 たちばな会
施設名	特別養護老人ホーム 天王森の郷

発表者名 (職種)	山田 遥奈 介護職員
共同発表者	村尾 一
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市泉区和泉町 733
TEL	045-804-3311
FAX	045-804-5005
メールアドレス	tennomorinosato@tachibanakai.or.jp
URL	http://tenmori733.jp

今回の発表施設 またはサービスの 概要	当施設は、横浜市と藤沢市の境に位置し、緑豊かな自然に囲まれた環境にある従来型特別養護老人ホームです。定員 150 名（本入所 143 名、短期入所 7 名）。地域密着型通所介護・居宅支援事業所を併設している。
---------------------------	--

研究の目的、PR ポイント

【はじめに】

近年、お客様のケア重度化に伴い、職員の身体的負担が増加している。特に移乗介助においては、2人介助が必須のお客様数が増えるなど顕著である。

取り組んだ課題

職員とお客様双方の負担軽減を図るため、スライディングボードを導入し、スライディングボードの効果的な活用方法を見出し、さらなるケアの質向上や事故の防止に繋げていく。

具体的な取り組み

取り組みは以下の通り。

- ① 研究対象
2人で移乗介助を行うお客様
- ② 研究期間
令和4年7月～10月
- ③ データ収集及び分析方法
月ごと各フロアのスライディングボードの活用方法や状況について情報を収集し分析する。
(サブリーダーが情報収集し、リーダーがまとめる)
その中で、職員視点・お客様視点でそれぞれ良かった点と悪かった点をまとめ、評価と今後の課題抽出を行い、その中で良いと思われた方法を研究の成果として各フロアに周知し実践できるようにしていく。本研究の成果として良かった点も併せて周知して、今後のケアの質向上に繋げていく。
⇒手技に関して基本的な方法は、リスク委員が昨年度情報周知のため、詳細を発信しており、不明点はリスク委員会で確認する。

活動の成果と評価

良かった点

(職員)

- ・ 職員の性別や身長に関わらず、スムーズな移乗介助が行えた。
- ・ 新しい福祉用具を使用する事への関心が多く見られるようになった。
- ・ スライディングボードの使用対象となるお客様は、

2人介助が必須となり、無理な移乗を行うことが減った。

- ・ 重力に逆らうような移乗ではなく、滑る様にして行うため、腰痛軽減になった。
 - ・ お客様の体格に関係なく、移乗がスムーズに行えた実感がある(以前は力技で行うケースが多かった)
- (お客様)
- ・ 原因不明の事故が軽減した。
 - ・ リラックスした状態で移乗を行えているお客様もいる。

悪かった点

(職員)

- ・ ボードの定着までに時間が掛かった(やり方が難しい)。
- ・ 角度を合わせたりセッティングの時間が掛かるため、離床介助に大きく時間が掛かってしまう。
※ 1 ケア 1 消毒でかなり時間を掛けている。
- ・ 起床時や就寝時に時間を掛ける必要があり、食堂の見守りが手薄になる時間が発生する。

(お客様)

- ・ エアーマットを導入しているお客様は、マットの高さのせいでやりにくい。(やや抱えるような動作が入りがちになってしまう)
- ・ 入浴時に活用できない。
- ・ お客様のADLによっては、ボードの上を滑りにくい事例もある。
- ・ リクライニング車椅子の種類によって、チルト式でないものはかなりやりにくい。

今後の課題

- ・ 移乗にある程度時間が掛かる事を想定したオペレーションの改善が必要。
- ・ 入浴時にストレッチャーや入浴介助用椅子への移乗方法を考慮し検討していく。

4-10

演題	正確な排便量を知ろう！
副題	～施設内での排便量の統一、卵1個はどの位？～

法人名	社会福祉法人 竹生会
施設名	たきがしら芭蕉苑

発表者名 (職種)	成田 美涼 看護師等
共同発表者	鈴木 進司
共同発表者	石田 恭平
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市磯子区滝頭 2-30-1
TEL	045-750-5151
FAX	045-750-5152
メールアドレス	chikubu.sakashita@shonanbayarea.com
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	社会福祉法人竹生会特別養護老人ホームたきがしら芭蕉苑は、平成16年に開設しました。定員は、本入所120床・ショートステイ10床の計130床です。サテライト施設に特別養護老人ホームちくぶ坂下ホーム29床があります。
---------------------------	--

研究の目的、PRポイント

「排便量」は入居者様の健康管理や排便コントロール上とても重要です。これまで、排便量の表現方法に関して「卵何個分、小・中・多量」等の取り決めがありました。しかし、卵の大きさや「小・中・多量」に相当する実際の量の感覚が職員によって違っていた為、同じ表現でも実際の量に差が生じてしまい、正確な量の共通認識が出来ていない状況でした。そこで、看護課・栄養課・施設福祉1課・2課で協力し、排便量を表現する時に個人差が生じない為の基準を設けることにしました。誰でも一目で基準を確認し正確に伝えられるように、どのような所に工夫して考えたかを発表したいと思います。

取り組んだ課題

- ① 有形便の基準の見直し
- ② 無形便の基準の見直し
- ③ 新しい基準の周知徹底

具体的な取り組み

- ① 有形便の基準の見直し
 - ・ 卵1個分のサイズ等を決める
 - ・ 粘土で目安となる模型を作成
- ② 無形便の基準の見直し
 - ・ 卵1個分の基準に合わせて小、中、多量の量を決める
 - ・ 泥状便、水様便の疑似便を作成する
 - ・ 実際に疑似便をパットに出して目安となる模型をつくる
- ③ 新しい基準の周知徹底
 - ・ ポスターや研修等、周知の方法を決める。
 - ・ アンケートで職員の意見を聞く
 - ・ 実際の周知度と効果の確認

活動の成果と評価

様々な性状のある便をどのような基準で量を統一し表現するかにとっても悩みました。そこで、私達は+1(卵一つ分)を50mm×40mm・60gとし色々な形状や性状の疑似便を作り周知することにしました。それにより個人の感覚によって生じていた便量の差は少な

くなり排便コントロールもより正確に行うことが出来るようになり一定の効果があったと感じています。

今後の課題

今回の取り組みで職員間での排便量の共通認識が出来ました。今後は、この基準を用いて収集した情報から入居者さん個々に適した排便量や排便パターン等を明確にしていき医療や介護面での個別ケアに繋がっていきたいです。その為には、継続して職員の認識の確認を行ったり新人教育に組み込んでいったりできるように研修等を考え行っていきたいです。

4-11

演題	楽楽入浴介助
副題	～ウルトラファインバブルで幸せいっぱい～

入浴業務改善
入浴装置

法人名	社会福祉法人 緑成会
施設名	特別養護老人ホーム 新緑の郷

発表者名 (職種)	伊東 正貢 介護職員
共同発表者	樋口 慎也
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	川崎市高津区久末 473 番地 14
TEL	044-948-7025
FAX	044-948-7023
メールアドレス	nakajima@midorinosato.or.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	特別養護老人ホーム 新緑の郷 ・事業開始 平成 30 年 5 月 1 日 ・入居者定員 本入所 122 名 ショートステイ 14 名 ・2F～3F 従来型 82 床 ショートステイ 14 床 ・4F～5F ユニット型 40 床
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

入浴業務における洗体方法や入浴時間の改善をするためウルトラファインバブル発生装置を導入した。その結果、洗体に掛かる時間が減り入浴時間が伸びたためご入居者の入浴に対する満足度が向上した。発生装置導入前と導入後でご入居者の入浴方法がどう変わりご入居者の気持ちや業務にどのように影響を与えたかについて検証した。

取り組んだ課題

- ・洗体による拘縮した部位及び皮膚への負担軽減
- ・入浴介助に掛かる時間の短縮による業務改善
- ・入浴に対する満足度の向上

具体的な取り組み

- ・ウルトラファインバブル発生装置の導入後の効果の検証
- ・検証期間 2022 年 10 月～2023 年 5 月
- ・検証人数—入居者延べ 42 名、介護職員 10 名

活動の成果と評価

- ・洗体による身体的負担の軽減
- ・満足度の向上
- ・入浴介助業務の負担軽減

今後の課題

- ・清潔保持しリラックス効果が得られる入浴時間の検証

参考資料など

- ・ウルトラファインバブル発生装置製品資料

4-12

演題	繰り返す臀部の皮剥けに対するアプローチ
副題	

法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
施設名	わかたけ青葉

発表者名 (職種)	高木 美穂 介護職員
共同発表者	末高 真吾
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市青葉区奈良 4-6-1
TEL	045-960-0651
FAX	045-960-0653
メールアドレス	nakamura_akira@wakatake.or.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	横浜市青葉区に 2006 年に開所した特別養護老人ホーム。全室個室のユニット型施設で、“おひとりおひとりのペースを大切にす生活の実現”を信念に、自分らしい生活ができるよう、優しく質の高いケアを目指している。
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

繰り返して起きている臀部の皮剥けに対して褥瘡対策委員会内で対策を検討した。他職種共同により、複数の手段を用いてアプローチを行った。その結果を報告する。

取り組んだ課題

繰り返して発生する皮剥けなどの炎症に対し、褥瘡の危険因子である、除圧、皮膚状況の改善、蒸れの防止を目指し、エアーマットやパワークッション、ココナッツオイル、排泄用品の検討といった手段を用いて状況の改善にアプローチをした。

具体的な取り組み

対象者 2 名にそれぞれ 1 日 2 回排泄介助の後にココナッツオイルをスプーン 1 杯程度の量を臀部に塗布した。期間は 2 か月ほどで、ココナッツオイル塗布のほかに、身体の状態に合わせて除圧の目的でエアーマットやパワークッションの使用、蒸れ防止の目的で吸水性に特化したオムツ、パットの使用を行った。

活動の成果と評価

開始から 1 か月弱の結果として、対象者の 1 名は肌の色調が良くなり、艶と張りの向上が見られた。もう 1 名も、同様の結果が確認できたが、元々色素沈着があり、効果の実感が前者と比べてわかりづらかった。また、掻きむしりがあり、そちらへの対策として、蒸れ防止対策を行うことにした。蒸れ対策としては、着用している排泄用品のメーカー変更をし、通気性の良いものを採用した。

※肌の状態は、施設職員の目視、触感で判断したもので、科学的な検査は実施していない。

ココナッツオイルは、アズノールのようなサラサラしてしまい皮膚に長時間残らない薬と違い、皮膚表面をコーティングするため、乾燥予防と便などの拭き取りの補助的効果が認められた。

成果としては、複数の手段を用いることで、除圧、皮膚の改善、蒸れ防止の一定の効果を確認することができ、皮膚状況の改善が見られた。現在も状態を維持できている。

今後の課題

成果に個人差があると思われる為、その差がどこにあるのか引き続き考えていきたい。

各道具の使用を継続し、皮剥けに対するアプローチの確立を目指して施設内で共有し、様々な取り組みを行っていきたいと思う。

また、今回は“皮剥け”に特化した内容だが、一つの問題に対して改善を図るためには、このように複数の手段を組み合わせることが大切であると考えている。